

天然記念物コクガンの衛星追跡開始

2014 年 1 月 21 日に気仙沼市大谷海岸で、ガン類の一種であるコクガン 9 羽を捕獲し、そのうち 5 羽に衛星送信機を装着しました。希少種コクガンの衛星追跡は、アジアではじめての試みとなり、国内外の関係者から注目されています。

1 コクガンの生態

天然記念物および環境省レッドリストで絶滅危惧Ⅱ類に指定されているコクガンは、北極圏のツンドラで繁殖し、冬鳥として 10 月以降北海道東部の野付半島や風蓮湖などを中継したのち、函館湾や陸奥湾、南三陸沿岸などで主に越冬する。浅い海や内湾、汽水の潟湖などを利用し、非繁殖期にはアマモやアオサ類、アオノリ類などを採食する。これらの藻場は魚類の重要な産卵・生息場所ともなっている。東日本大震災で被災した岩手県陸前高田市から南三陸町の南三陸沿岸では、コクガンが 300～400 羽ほど越冬する。

2 研究の背景

国内にまとまった群れとして飛来するガン類のうち、沿岸域を生息地とするコクガンは越冬生態や渡り経路、中継地、繁殖地など不明な点が多い。これまでの研究によって、震災後、コクガンは採食場所を海上から漁港へと大きく変え、生息環境の変化に対応していることが明らかとなった（参考資料参照）。

3 目 的

この研究では、衛星追跡で得られたコクガンの位置情報によって以下のことを明らかとする。

- 1) 越冬地である南三陸沿岸でのコクガンの詳細な局所的移動、環境利用を解明し、生息環境と藻場の対応関係を明らかにし、コクガンをモニターすることによって漁場環境の回復状況を明らかにするシステムを構築する。
- 2) これまで不明であった日本で越冬するコクガンの渡り経路、中継地、繁殖地を明らかにし、希少種であるコクガンの保全にかかわる基礎資料とする。

4 衛星送信機の装着日時及び場所

平成26年1月21日 気仙沼市大谷海岸

5 調査者

(1) 研究主体 (公財) 宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団

(2) 研究協力 慶應義塾大学 樋口広芳特任教授
日本雁を保護する会 呉地正行会長ほか

6 内容

コクガン9羽を捕獲し、計測後5羽のコクガンに衛星送信機を装着した(下記写真)。今後、衛星追跡を開始する。希少種コクガンの衛星追跡は、アジアではじめての試みとなる。



衛星送信機を装着したコクガン (写真提供：宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団)

*別途メールにて提供できます (アドレスをご教示下さい)

7 その他

本研究は、三井物産環境基金 2011 年度復興助成 (案件名：南三陸沿岸のコクガンは藻場再生のシンボル！震災後のコクガンの分布をモニターすることで漁場再生の手がかりを掴む) により実地した。

(参考資料)

東日本大震災がコクガンの越冬分布に与えた影響

日本鳥学会誌 (2013) 62 : 9-15

嶋田哲郎・呉地正行・鈴木 康・宮林泰彦・樋口広芳

東日本大震災が南三陸沿岸で越冬するコクガンに与えた影響を調べるため、岩手県陸前高田市の広田湾から宮城県石巻市の北上川河口にかけて、2011-2012年の冬期に調査を行った。2011年11月下旬-12月上旬、2012年1月上旬、2月下旬の3回、コクガンの分布を調べ、3回の調査でそれぞれ291羽、380羽、403羽のコクガンが記録され、観察されたコクガンの個体数は震災前のデータと大きな違いはなかった。群れが確認された環境をみると、11月下旬-12月上旬と1月上旬では漁港で59%、海上で35-41%と同様な傾向を示した。震災前には漁港でコクガンが観察されることは稀であったが、地盤沈下した岸壁や船揚場に付着した海藻類がコクガンの食物資源となったこと、震災後の漁港への人の出入りの減少に伴いコクガンが妨害を受けずに安定的に利用できるようになったことに加え、震災前の採食場所であったワカメやカキなどの養殖筏が津波によって消失したためと考えられた。一方で、2月下旬になるとそれまでより漁港を利用したコクガンの割合は減少し、海上や砂浜を利用したコクガンの割合が増加した。ワカメやカキの養殖筏の復興、それらに付着した海藻類の生長につれてコクガンの食物資源量が増加したと考えられる。震災によってコクガンの生息環境は大きく変化した、採食場所をシフトすることでその変化に対応していると考えられる。